
純心・純情・一本気 乙女心！

十田 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純心・純情・一本気 乙女心！

【Nコード】

N7424P

【作者名】

十田 心

【あらすじ】

剣道の道場へ通うようになって半年、けれどもどうしても打つことが慣れない一人の生徒。そんな生徒を休憩中に中庭へ連れ出して、説教と激励を送る若い師範代。

・・・・・・・・主人公は師範代で、生徒の出番ほぼないです（汗）
過去にテーマ「コスモス」で書いた作品の手直しです。

コスモス 1

「先生、このコスモスってすごくおっきいですよね」

「そうだね。その一本なんかは夏に咲いたヒマワリより大きいんじゃないかな。みんな同じなのによくここまで伸びたもんだ」

ぼくも大きくなりたい。強くなりたい。でも、いやだ。

「これだけ葉っぱがちよつとしかないし、くきも木の枝みたい」

ちよつと前におじいちゃんから教わった。木はみきが、花はくきが、葉っぱや花を支えてるって。だけど、このコスモスのくきは苦しそうな斜め。

大きくなりたい。強くなりたい。けどこのコスモスのようになりたくない。

「先生。ぼく、剣道やめたくないです」

毎週この道場にきて慣れてきたけれど、どうしても慣れないこと。ずっと先生に注意されてきた。どうしても直せないけど、強くなりたいから。やめたくない。

「ん。じゃ、これからは相手をしっかり痛めつけなさい」

「やめたくないけど、打つのもいやです」

強くなりないけど、強くなりたくない。いつもそこで迷って、すごく考える。

それでいつも頭が痛くなって、途中で考えるのを止めちゃう。

「ワガママだな。君が道場に通う理由だろうが。同じクラスの子と喧嘩したいんだろ？」

あれ？ 先生に話したことあったけ？ でもアイツとケンカした
いなんて考えたことない。

「ケンカはきらいです。痛いし、こわいからやだ」

アイツのやってること止めたくて、なんとかしたくて。でも友達
がぶたれても、怖くて止めに行けなくて。

すごくどうしようもない自分がきらい。強くなって、アイツがす
ること止めたい。

でもなぐるのいやだ。痛いって分かるから。

「もしかして、一方的に攻撃することを喧嘩って思ってるか？」

「？ 人をなぐったり、けったりってケンカじゃないんですか？」

「うーん。そっか、今の子たちって上品なんだな。十数年くらい前
の、先生の小学時代は掴み合いとか取っ組みあいとか、よくしたけ
ど」

女の子だって男の子相手に、組み合ってたのになあ。髪の毛引っ
掴んだり。噛みついたり、股間狙ったり。

なんだか小さい声で聞きにくかったけど、すごいこと聞いた。

「先生もかみのけ引っぱったの？」

「先生はしなかった。相手の手が上にあるってことは、隙だらけの
所は他にたくさんできるから。喧嘩をするときは剣道と同じ。相手
に隙を見せちゃいけないぞ」

ケンカって、すごく怖い。

「話が脱線したな。まあそういう風に、殴りあうとか、蹴りあうとか、引っ張り合う、掴みあうって、相手とやりあうのが喧嘩ってものだよ。一方的に相手を殴るってのはただの暴力という」

暴力。あいつのやってることは、わるいことなんだ。

やっぱり止めてやらなくちゃ。でも、どうすればいい。

頭の中でいつものようにグルグル回りそうになると、先生が「フム」ってうなった。

「そのガキ大将もつまらないんじゃないか？ 拮抗する相手がいないって、本当に退屈なことだから」

先生は大きなコスモスを見た。ぼくも見る。

一番大きなコスモスが、仲間外れになったのが悲しくて、頭を垂れているように見えた。大きいけど、そのせいでのけ者にされて。

「先生も喧嘩相手が消えたとき、相当暴れたもんだよ。族入りなんかはしなかったけど」

ゾクイリって何？ って先生に聞こうとして振り返ると、ニコッてきれいに笑った。

「今はそのかわりに、君のような生徒をしごくのさ。ということで、そのガキ大将と相手取れるくらい強くしてやる。これからは週二じやなく、毎日来い。より鍛えてやろう」

「いい、いやです。先生のけいこ、きびしいんだもん！」

急に先生が楽しそうに笑ったと思ったら！

先生と打つのみんなと違ってすっごく怖いし痛い。先生は師範の一つ下の師範代で、教えてくれる先生の中で一番若くて強くてきびしい。ぼう具つけてるのに、打たれたところが青くなったり、はれたりして。うゝ、いや。ぜったい、いや！

「打つのが嫌って言う割に、先生が相手だと少しは打ってくるのはなぜだろうな？」

それは打たないとあとで先生が・・・・・・あうあう。

「防具をつけて竹刀を構えあう。お互いに打ち合うというのを覚悟しているのだから、逃げる一方、防ぐ一方というのは、かなり失礼なことだって何回も言っていることだろうが。防御に徹するだけじゃ、いつまでも喧嘩できないし、ガキ大将は打ちとれないぞ！ほら、休憩と説教はこれで終わり。とっとと道場へ戻って、素振りしてこい。あとで稽古付けてやる」

うわゝん。道場通うのやっぱりやめようかな。でもそれだとこんどはここに入れてくれた、いとこのお姉ちゃんに怒られるかも。あううう、せめてお姉ちゃんには毎日通いつてことばれせんように。

コスモス 2

「アキちゃん」

自主稽古を終えて自宅へ戻ろうと、道場から繋がる廊下を進むと前から小柄な女の子が小走りでかけてくる。女の子と言える年ではないのだが、とても自分と同じ二十代には見えない可愛らしさがある。彼女はそのまま抱きつこうとするが、まだ面以外の防具を外していないため、少し後ろに引いて痛くしないように抱きとめた。

「頼むから、防具付けてる時に突撃してくんな。怪我させたら悪いから」

「でもアキちゃんは男前で優しいから絶対受け止めてくれるじゃない。いつだってカッコいいよ」

色々と訂正を入れたいが、面倒で流す。この可愛い彼女には武力以外で勝ったことがない。

少し前、生徒に暴れたことをもらしたが、その荒れていた自分を治めてくれたのが彼女だ。恩人でもある。

その恩人から自分の従弟の臆病を直してやってくれと、頼まれたのは半年ほど前のこと。

当の従弟は相手の動きがしっかり見えているのに、全く打っていない。何というか、見ていてかなり苛立つ。筋金入りの臆病者。絶対こいつに肝っ玉と度胸をつけさせてやると、彼女に約束した。

今日は午後から彼女と遊びに出かける予定だったが、昼前に来たということは昼ごはんが目当てか。

何にせよ自分もシャワーを浴びたいし、自宅のほうへ連れていく。

「従弟の稔は小三なのよ。稔だけじゃないけれど、道場では言葉づかい、気をつけたほうがいいよ」

いきなり彼女にそう言われて、彼女の従弟に対してマズイことを言ったか思い返す。だが思いつかずに首をひねっていると、彼女がむくれ顔になった。

「族入りって何？　って聞かれたの。わかりやすく説明するの難しかったんだからね」

ああ、そういえばポロッと。というかしつかり説明したのか。

「んなこと言われても。これでも道場じゃ、かなり慎重に言葉を使ってるほうだぞ」

荒れていた時代がもちろん絶頂。元ヤンなめるな。いやヤンキーやった覚えはないけれど。

荒れ始めは周囲に泣かれた。だが自分にとって荒れる前の方が、思い出したくもない暗黒歴史だ。あの頃の自分は忘れさりたい。いや、忘れ去った。

彼女は自分のその思考を読み取ったのか、わざとらしい溜息をつく。

「今のカッコいいアキちゃんも好きだけど、あの頃のアキちゃんも可愛かったよね」

「そんな時代はない！」

「そうね。幼稚園の頃のアルバム、可愛かった」

そういえば彼女とは幼稚園から同じだった。彼女とは自分が大人しくなってきた高二くらいから親しくなったものだから、それ以前

のことはすっかり忘れていた。

仕返して彼女の従弟に言葉をイロイロと吹き込んでやろうかと考えながら、彼女を居間に放り込んで風呂場へ向かう。

口では負けるからと、逃げたわけではない。決して。

さっと汗を流し、部屋着に着替えて居間に戻る。既に母親が支度をしてくれたのか、ソウメンとお浸し、昨夜の残りものであるゴーヤチャンプルーが机に置いてあった。

彼女はウチのゴーヤ料理を気に入っているらしい。苦くて自分あまり食べないけれど。

他の家族はまだ昼飯を食べないようで、彼女と二人で食べることにした。

「稔、どう？ 少しは進歩してる？」

「やっぱ度胸がなく。それさえつきゃ、育つ可能性もでてくるんだが」

ソウメンをすすりながらの報告。あまりにもビクビクしている姿にイラついて、一体何でこのガキを道場に紹介したのか理由を聞いたのも、確か昼飯をしながらだったか。

「オレに対しては打つようになってきたから、あともうちよいかもしれんけど。活入れるために、今度から毎日来いって言っというた。少しの間、サボらないように見張ってくれ」

「そっから、分かった。ビシバシしごいてやってね」

「ああ、勿論。イジメ甲斐があるから、楽しみだ」

「でも、あまりいじめすぎないであげてね。昔の自分に似てるからって」

ゴーヤをつまんだ箸の先を、こっちに向ける。ハシで人を指すなと教わらなかったのだろうか、このお嬢さん。

「……常々思うんだが、その時代お前と関わりなかったのに、よく知ってんな」

荒れて道場に出入り禁止になるまでは、泣き虫だった。しかしそのくせ、あの頃は泣きながら喧嘩をふっかけてた。大概それは同じ相手で、それなりに力関係も拮抗していたから、奴とは喧嘩仲間ってところだったか。

奴が引越すまでは。

「企業ひ・み・つ」

ハートマークが浮かんでいそうな口調で言った。実際彼女の頭の中では飛び交っているんだろうな。

美味しいお昼御飯を堪能させてもらい、アキちゃんが部屋着からまた着替えた後、並んで外に出た。

「さて、今日のお出かけはいかがいたしますか。お姫様」

「今日は服を見に行きましょう。私の騎士様」

たまにこうして姫騎士ごっこをする。もとは私がふざけてやり始めた事だけど、しばらくしてアキちゃんも慣れと諦めが混じって、大分ノリが良くなってくれた。

ふと悪戯心が芽生えて右手をアキちゃんの目の前に差し出すと、アキちゃんは苦笑しながらもその手の甲にキスを落とす真似をしてくれる。

「はあゝ・・・・・・・・アキちゃんって本当に、そこらの男どもよりカッコいい」

自分で強要しておきながら、うっかり惚れてしまいそう。悦に入っていると、アキちゃんがちょっと退いた気配がした。

「道を踏み外すなよ？」

「アキちゃん、そこは『オレに惚れるなよ』って言って欲しかったな。大丈夫、何年の付き合いだって思ってるの。ヒラヒラで可憐な姿も知ってるもん」

「だから、何でつきあいのない期間の姿を・・・・・・・・」

大丈夫。今日のショッピングは、アキちゃんがメインなのだから。前々からアキちゃんの両親に、昔の可愛い秋華^{あいか}ちゃんに出来ないかと相談されていた。戻すのは無理だけれど、ほんの少し女の子にさせてみせよう。

姿を消した喧嘩相手も見つけた。喧嘩相手が引越す前に言われたこと。それが秋華ちゃんの荒んだ原因という情報を掴んでから、探していた。私の情報網に穴はないんだから。あとはトラウマを乗り越えさせるなり、くっつけ・・・・・・・・ううん、あんな男に私の秋華ちゃんをあげない。乙女よね、当時好きだった相手の言葉で変わっちゃうなんて。純情ね、純粹ね。従弟の稔とそこが似てるのよね。自分で気付いてるかな？

まあそれは置いておいて。今日はたくさん秋華ちゃんを飾ってあげよう。

「秋華ちゃん。コスモスの花ことばって知ってる？」

「乙女のなんちゃってだっけ。昔、オレの名前の由来だとかで何度も聞いたけど。そうならなくて至極残念無念だなもんさ」

大丈夫。私がその由来通りに仕立てあげるから。

お化粧の仕方もある。お化粧の仕方もある。

それから、「オレ」から「あたし」くらいには直させないとね、やっぱり。

課題はまだまだいっぱい。数年がかりの「秋華ちゃん大改造計画」開始よ。ふふふ。

くおわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7424p/>

純心・純情・一本気 乙女心！

2010年12月29日18時31分発行